

2002年6月20日

ディケンズ・フェロウシップ日本支部 ニューズレター

2002年度春季大会は6月8日、荒井先生のお世話で駒澤大学において開催された。ディケンズ・フェロウシップ設立100周年にふさわしく、知的興奮をそそるプログラムが用意され、ほぼ80名が参加した。この日、小池先生よりふたたび“Pickwick Tea”の寄贈があり、参加者はゆかしい紅茶を楽しみつつ、発表に聞き入った。以下、大会の内容および諸報告をお知らせいたします。

春季大会

ディケンズ・フェロウシップ設立100周年の今年、4月にはMalcolm Andrews 教授来日の機会をとらえ、関東、関西でそれぞれ講演会が開催されました。夏のLondon Conference では松村昌家氏の講演が予定され、つづく“A Man for All Media”のConference では「ディケンズとフィルム」のセッションで佐々木徹氏が司会を務めます。支部の存在を広く世界に知ってもらういい機会となりました。支部大会は、常々、楽しくかつディケンズ理解を深めるプログラムを準備するよう心がけておりますが、今回は研究発表とディケンズ批評のシンポジウムに加え、佐藤真二氏にお願いして特別朗読を組み入れました。ディケンズ自身、創作、演劇、朗読において読者、観衆をずいぶん楽しませましたが、フェロウシップの大会も、作家に負けず、楽しく、かつ、知的興味をそそるものにしたいと思っています。以上の支部長挨拶につづき、研究発表とシンポジウムが行われた。

1 研究発表 (14:20-15:00)

David Chandler 氏による“The Battle of Life”研究は、遠くボッカチオに見られる“friendship literature”の伝統を踏まえたものだとの視点から「軽視された作品」を見事に重視させる、いい発表であった。司会役の佐々木氏が“You really surprised us.”と要約した一文に、斬新さと質の高さがよく表わされている。

2 朗読 (15:00-15:20)

荒井良雄氏の巧みな紹介を受けて壇上に立った佐藤真二氏は、コックニーを多用する“Doctor Marigold”の一節を、じつに流麗に、かつ演技をたっぷり取り入れて朗読し、会場を大いに沸かせた。

3 シンポジウム「ディケンズ批評 発展の時代」(15:40-17:40)

原英一氏(東北大学)の司会のもとに、次の3名が1940~1965年間のディケンズ批評を解説し、それにたいする質疑応答が行われた。

(1) 山本史郎氏(東京大学)はHumphry Houseによる本格的実証研究に焦点を合わせ、それまでの歪んだディケンズ像が是正された点を指摘。

(2) 原英一氏はJ. Hillis Millerを取り上げ、彼のディケンズ研究が1960年代にもはやされた理由を明快に分析した。Millerは50年代、60年代のアメリカの文化的背景 自己疎外、アイデンティティー探求 をディケンズ小説を通して語り、その抗しがたい緻密な理論がディケンズ研究を大きく花咲かせることになったと述べる。しかし、Millerにはイギリスの喜劇的伝統を切り捨てていることが欠点であることも合わせて指摘した。

(3) 植木研介氏(広島大学)はSteven Marcusを取り上げ、彼の*Dickens: From Pickwick to Dombey*には続編が出ていないので、彼の全業績は要約できないと述べ、Hillis MillerとMarcusを比較しつつ、この時代を要約した。前者が「悪魔的」なほど理論構築にすぐれているとすれば、後者は実証性に強みを発揮し、Millerがある事象をどう説明するか集中するのに対し、Marcusは自分に納得のゆくまでこれを追及する。だが、煎じ詰めれば、両者は似たことを考えていたのではないかと結論した。

3者の発表に対し、会場からは質問や補足説明が相次ぎ、熱気に包まれたシンポジウムとなった。

4 懇親会(於駒澤大学会館)(18:00~20:00)

40名を超える会員が参加し、問二郎氏の乾杯の音頭を受け、なごやかな語らいの場が繰り広げられた。

諸報告

- (1) 『年報』への論文投稿を募集します。論文原稿（フロッピー・ディスクおよび清書原稿）は原稿用紙 35 枚以内、締切は7月10日（必着）投稿先は日本支部事務局宛です。理事の審査（採・否・再提出）をへて受理・掲載します。
- (2) 『年報』への記事・ニュース投稿の締切は7月31日です。
- (3) 2002年度総会は10月5日、甲南大学において開催します。講演はLillian Nayder 女史(Bates College)による「Dickens と Collins の Partnership」についてです。ご期待下さい。なお、研究発表をご希望の方は、8月20日までに日本支部事務局に申し出てください。
- (4) 日本におけるディケンズ研究書誌を作成するため、皆様のご協力をお願いいたします。会員（および会員以外の方の）2001年度（2001.4～2002.3）の著書・論文等のリストを、同封の用紙に記入の上、お送りください。e-mailの場合、送り先は下記の通りです。
松岡光治理事宛 (e-mail: mitsu@lang.nagoya-u.ac.jp)
- (5) 会員の過去1年間の業績（著書、論文等）を同封の用紙に記入し、日本支部事務局にお送りください。『年報』に掲載いたします。なお、紀要論文について、是非とも公開に御協力いただきます様、お願いいたします。 matsuoka@cc.nagoya-u.ac.jp まで添付で送っていただければ幸いです。

以 上